

神禾原—消えた森林—

文学部 山田利明

キーワード：森林・長安・神禾原・杜陵・終南山・足立喜六

かつて中東一帯にはレバノン杉の森が広がっていた。古代メソポタミアやエジプトの文化は、このレバノン杉によって栄えたといつてよい。殊にこの二つの文明に共通するのは、宮殿やピラミッドに象徴される巨大建築であり、その工具・用材にこれが用いられた。それが可能だったのは、高さ四〇米、幹周一〇米に及ぶ巨木が至るところに存在したからである。

この良質の木材は、地中海沿岸各地に運漕され、ギリシャ、ローマの文化をも支えた。建築用材以外には、軍船・運漕船などの長尺材を用いる建造物に使用されたため、紀元前後にはあらかたの巨木は消え、表土の現れたハゲ山が広がっていたといわれる。この原因は、もちろん杉の乱伐にあるが、メソポタミア・エジプト・ギリシャ・ローマという古代文明発祥の地に近く森が存在したところに、その源流がある。

それから八〇〇年ほど経て、中国でも同じような状況が現出した。長安（西安）の南一五軒ほどのところに神禾原がある。現在は畑地と草地と工場が入り混じる一帯であるが、かつては広大な森林地帯であった。この森に初めて斧を入れたのは秦の始皇帝である。長安の西郊に宏大な阿房宮を建て、秦の滅亡に際しては、三ヶ月に渉って燃え続けたという。以後、漢・隋・唐はこの地に都をおき、拡張発展させた。しかも重なる戦乱のたびに破壊と火災が繰り返され、その復興のたびに森の木は伐られた。

こうした状況は歴史の上ではあまり語られない。資料もないし、その痕跡もほとんど残されていないからである。ここでは、歴史上の文献の中にわずかに留められた記事から、そのあとをたどってみる。

1

地図を見ても分かるように、現在の西安市の北には渭水が流れている。西安の南には終南山があり、その谷あいからいくつもの川が流れ出て西安の南郊を潤して、黒水に流れ込み、その黒水は渭水に合流する。その合流点の近くに咸陽がある。西安の西二〇軒ほどのところである。ここが、秦始皇が築いた咸陽城の故地である。終南山山塊から伐り出された木材が、この黒水を通して渭水沿岸の咸陽に

送られ、始皇による咸陽城の修築に用いられたであろうことは、その地理的条件から十分に推察できる。

もともと咸陽城は、秦の孝公のときに国都として築かれ、渭水の北側に造営された。始皇が中国統一をはたした後、天下の富豪十二万戸を咸陽に移し、各国の宮殿二百余棟を移築させた（『史記』始皇本紀）。というから、大規模な建築ブームが起ったに相違ない。

「天下の富豪を徙すこと十二万戸、諸廟および章台、上林みな渭南にあり。秦は諸侯を破るたびに、その宮室を写放（倣）してこれを咸陽の北の阪上に作る。……殿屋は複道を閣に周らせ相い属せしむ。」（『史記』秦始皇本紀）

これによれば、各国から移築し、あるいは倣築した宮殿には、それぞれに上下二階になった複道をめぐらせたという。

有名な阿房宮（図1）の造営については、

「北山の石檟（榔）を発し、蜀荆の材みな至る」（『史記』秦始皇本紀）

という。同じような記述として、唐の杜牧の「阿房宮賦」にも、「蜀山^き兀られて阿房出ず」の一句があり、蜀（四川）の山を伐り阿房宮を現出したというから、この話しは長く伝えられたのであろう。北山の石榔というのは、咸陽の北にある山腹の古墳の巨石をいう。これを掘り出した。いずれにしても、阿房宮建設にはかなり広範に材を求めたことが知られる。ただし、こうして各地から集められた材は、いわば良材であって、それ以外の用材や用具は地元のものが使われた。『史記』には、徒刑者十七万人を集めて造営に従事させたというから、その飯場だけでも相当の材を必要とする。時も場所も異なるが、『樂府詩集』に「豫章行」なる古詩一首を取める。

白楊初めて生まるるの時、乃ち豫章の山にあり。上葉は青雲に摩し、下根は黄泉に通ず。涼秋八月、山客斧斤を持ちて……根株すでに断絶し、巖石の間に顛倒す。大匠は斧繩をもち、鋸墨もて両端を齊しくす。……身は洛陽宮にあり、根は豫章山にあり。

詩意は、豫章の山に生えた古白楊の木が、あるとき伐採されて幹と根に分断された。幹は繩墨によって両端をそろえて切られ、洛陽の宮殿の用材となったが、根は豫章山に残したまま、いずれの日ぞ再び相い連なるのか…。中に欠字があるが、大意は以上である。おそらく白楊は高級材か長尺材であったのか。洛陽宮とあるから後漢の作であろう。森を伐るのに、必要な材の種類と大きさ（長さ）に合ったものだけを採ったことがわかる。豫章は長江の北側、洛陽の南八百軒程の所である。根と幹が中原を挟んで、黄河沿岸と長江沿岸に離れ離れになった悲哀を詠った詩であろうが、南部の木材を運ばなければならなかったことは、黄河沿岸の大材がなくなったことを意味する。始皇の時も同様であったと考えてよい。蜀荆から送られた材は、地元にはない大材であった。

秦漢交替の際、秦宮は項羽によって焼かれ、漢高祖は、長安を避けて洛陽に移ったが、後に、長安

に遷り未央宮を営む。三十年ほどの間に、咸陽宮・阿房宮・未央宮の壮麗な三宮殿が作られたことになる。皇帝の力をもって材を諸国に求めたとしても、庶民の家屋や日々の薪炭は近郊の樹林によるほかない。しかも、国都としての繁栄は、さらに土木の用をもたらせたと考えてよい。

秦にしても前漢王朝にしても、咸陽宮・阿房宮や未央宮だけを造ったのではない。武帝の時代、漢は全盛を極め、巨万の財を集めた。例にもれず武帝は新たに建章宮を造営して、天下の華美を誇る。おそらくこの頃になると、長安周辺の巨木・大木はほとんど尽きたと思われる。それというのも、王莽の篡奪とその後の賊乱によって長安は荒廃する。未央宮も一部は焼け、内部は掠奪されている。これに対して後漢王朝は屋根を葺いただけで本体の修理をしていない。結局、後漢王朝は、長安を復興することなく、洛陽に遷都するが、それにはこの地のもつ地力そのものが衰退したことを示すと考えられよう。都城は宮城だけで成り立つわけではなく、そこに生活する数十万の人々の住居や薪炭も必要となる。それに耐えうる資材が入手できなくなったということであろう。先記した豫章の古木の嘆きは、ここに起因する。

三国・六朝期には、政治・文化の中心が他に移ったことから、この地は比較的静穏な期間を経る。それでも姚秦の国都となり、鳩摩羅什を始めとする西域僧が入り、仏寺が多く興っている。羅什は長安郊外の逍遥園に留まった。園中には池があり荷が花を咲かせていた。長安は、北に渭水が流れ、南は終南山北側から流れ出る数条の河水が長安南郊を潤して渭水に合流する。中国には珍しい温泉華清池もあった。水に恵まれた土地である。特に終南山北麓を流れる河川は、この地を樹林帯として育てたが、その北麓の台地は、五つの河川が流れ河川と河川間の台地には、東から銅人原、瀟水を挟んで白鹿原、滻水を挟み少陵原、澧水上流の支流を挟んで神禾原と続く。『水経註』渭水の条に、銅人原の東北の驪山に築かれた秦始皇陵を記して、「銅をもって槨となす」とある。同じ記事は『漢書』賈山伝にもあり、「金石を采合して銅を冶てその内を鑄す」とあるから、槨室をほとんど銅で鑄造したのであろう。因みに『水経註』はいう、「項羽関に入りこれ（始皇陵）を發く。三十万人をもって三十日、物を運び窮めること能はず。関東の盜賊は槨を銷して銅を取る」と。三〇万の人夫を使い三〇日間副葬品を運び出したが、まだ尽きることにはなかった。その後、潼関の東から侵入した盜賊は、棺室の銅を熔かして持ち去った。銅人原と名づけられたのは、漢の武帝が甘泉宮に置いた銅人からの命名か、あるいはこうした話からか分らないが、三〇万人、三〇日というのは語呂を合わせた趣がないではない。少陵原には前漢宣帝の杜陵があり（図2）、宣帝の皇后の少陵があるところからの名であろう。杜甫が少陵と号するのは、この地に先祖が住んでいたことによる。杜詩を見ると、しばしば南郊の知人の山荘に行き、詩に残している。

鄭広文に陪して何將軍の山林に遊ぶ 唐・杜甫

識らず南塘みちの路
今ぞ知る第五橋

名園は緑水により
野竹は青霄に上る
谷口もとより相い得て
濠梁同じく招かる
平生より幽興のために
未だ馬蹄の遙かなるを惜しまず

南塘・第五橋は長安南郊の地名。唐の長安は現在の西安より南にあった。この南郊に何氏の山荘があった。この台地が山林であったことは、詩題や詩句中の幽興などという語からも知ることができる。杜甫はこの山林がよほど気に入ったらしく、この後も何回か訪ねている。

神禾原には、浄土教を大成した善導大師ゆかりの香積寺がある。王維の詩に「香積寺を過る」という五言詩がある。

香積寺を知らず
数里雲峰に入る
古木人逕なく
深山何れのところの鐘ぞ
泉声は危石に咽び
日色は青松より冷ややかなり
薄暮空潭の曲
安禪毒龍を制す

「古木人逕なく」とは、ここもまた深い林の中の仏寺であったことを示す。一句一句の詩句はさておいても、詩全体に溢れる興趣はやはり深山幽谷である。おそらく、写真で示したような、現在の楼観台と同じような山林中の古寺であったものと思われる。

少陵原・神禾原だけが樹木で覆われていたとは考えにくい。同じ地に隣接する銅人原や白鹿原もまた、少陵原や神禾原と同じような山林の様相をもっていたのであろう。ただ「原」というのはどういうことであろう。通常この字は原野をあらわす。

王仁裕『開元天寶遺事』には銅人原と白鹿原の間を流れる灞水に灞橋がかかる。長安の人は東に向かう客をこの灞橋まで送るのを常とした。別れに臨んで一帯に茂る楊柳の枝を折って惜別の情をあらわにしたと。

友人の東に帰るを送る 唐・戴叔倫
万里楊柳の色
関を出て故人を送る
輕烟流水を払い

落日行塵を照らす
 夢を積む江湖の濶
 家を憶う兄弟の貧
 灞亭ほとりの上を徘徊して
 語らずおのずから春を痛む

楊柳枝詞 唐・韓琮

枝は織容あらせを闊い葉は眉を闊う
 春来たれば處々に絲に如かざるなし
 灞陵原上離別多し
 長条の地を払い垂ることあるなし

二首を選んだが、この地が楊柳にあふれたところであったことを記す。「見わたす限り楊柳の新緑」（万里楊柳の色）、「春来ればあちこちに絹糸にも勝る枝が垂れる」（春来たれば處々に絲に如かざるなし）。春になれば客を送る人多く、みな柳の枝を折り別れを惜しむため、枝は地にとどくことなし。注目すべきは、ここが灞陵原と称されていることである。つまり唐代には白鹿原ではなく灞陵原といわれた。「万里楊柳」は過剰であろうが、それでも柳の新緑に染まった灞陵原は、原野ではない。比較的平坦な地を「原」といったとすれば、そこには森や林があっても原と称されたのか。因みに『漢書』地理志上に、「南陵、奉明、霸陵、杜陵」の名が記される。南陵・霸（灞）陵は白鹿原にある。唐の顔師古の注に、「沂水出藍田谷」とあるから藍田上流の地であろう。杜陵は少陵原にある。（図3・4）

2

足立喜六著『長安史蹟の研究』という書がある。初版は昭和八年十二月、東洋文庫から上下二巻本として出された。著者の足立氏は、明治三十一年（一八九八）に東京高等師範学校（東京教育大学→筑波大学）を卒業後、同三十九年（一九〇六）に清国政府の招聘により西安の陝西高等学堂で教鞭をとる。当地ではほぼ四年間にわたり、西安および近郊の史蹟調査を行い、その調査所見（上巻）と一七〇葉にのぼる写真を印行したもの（下巻）が本書である。調査は当時としては詳細をきわめたもので、史蹟の位置、寸法を記し、調査時の状況を加えている。おそらく当時も現在も、これに勝る長安史蹟の報告書はあるまい。実際この書は昭和一〇年（一九三五）に商務印書館より華訳されて出版されている。その後永く絶版であったものが、昭和五八年（一九八三）東洋書林刊・原書房発売で復刻影印され、さらに平成一八年（二〇〇六）に鳥影社より再度復刻された。本書の特徴は、史蹟の現況を調査

ただけではなく、歴史文献記録をも網羅して、その記述にもとづく状況をも比較されているところにある。

本稿でも、この書を参照したところが少なくないが、圧巻は一七〇葉に及ぶ当時の現状写真で、史蹟の荒廃の状況がよく分かるし、それ故にこそ、現在では修復されて変わってしまった史蹟の原況を知ることができる。これらの写真を見ると、西安郊外には畑地が広がるのみで、一本の立木、一藪の林も見えない。清朝末期の状況がよく示される。畑の中に点在する漢・唐の遺物、あるものは傾き、あるものは半ば崩れる。農地あるいは原野の中に蕭条として残る遺物はまことに奇異な光景である。

杜甫が遊んだ何將軍の山荘は、当時の土地制に鑑せば莊園であった。広大な園内には水流があり林があつて、狩りもできた。佃戸を有して農耕を営む圃田と山林などが混在して、佃戸の集落が散在するのが一般的な唐代頃の莊園であつたようである。山荘といつても主舎は豪壯な邸宅であり、その周囲には庭園が築かれた。長安郊外、特に南の郊外にはこうした莊園が多く、杜甫も何氏の山荘の外に、「藍田の崔氏の莊」を訪ねた七言詩などがあり、この一帯のいくつかの山荘に遊んで、その幽興を愛でている。藍田はすでに記したように灞水上流の白鹿原にあつた。

ところがそれから千年を経た清朝末期の足立氏の写真は、一木もない荒れ地が続く。撮影の時期が冬であつたのか。その地にはただ畝の跡が残るだけで作物の茎葉もない。それだけに沙漠の如き荒涼とした風景が映し出されている。ただ、終南山北麓に近く、神禾原や少陵原の最も奥まったところについては、「終南山の北麓の古木鬱蔚たる處である。脚下には田峪川の清流が数十尋の下を流れ」と足立氏は記している(図5)。すでに農地圃場になつた所は、もともとが山荘・莊園であつたから、その山林を拓けば比較的簡単に農地になる。かなり時間をかけて、そうした状況になつたのであろう。しかし、足立氏の著書にもあるように、周代から唐代に至る歴代の皇帝の墳陵と后妃の陵墓やそれに附属する石像石碑などはそのまま伝えられていて、そこに生える茅草の類が農家の燃料となつていたことを窺わせる。日本でいう一種の入会地に近い状態で伝えられてきたものと想像させる。もちろん陵の中はとつくに盗掘されている。足立氏によれば、始皇陵や漢帝の陵の近辺には、相当古い瓦磚の破片が露呈しているという。これこそが、古代からの盗掘の残滓である。

3

さて、唐代頃までの神禾原とその周辺の台地が、森林をもつた地域であつたことは、ほぼ理解されたことと思う。資料としては唐代の文献が多いが、唐代にすでに森林であつたところが前代にはハゲ山であつたとは考えにくい。黄土を含んだ地質は、一旦地表が露出してしまうと保水力がなく、森林の再生は難しいといわれる。そうであれば、王維や杜甫が愛で詩に詠んだこのあたりの光景は、少陵原や神禾原の自然の最後の状況を示したものといえそうである。それというのも、唐代までの莊園制

は、多くは前朝の皇族・貴族・功臣の所領した土地をそのまま唐代の皇族・貴族・功臣に与えたため、所領地は小さく分割されることなく大土地所有が続いた。荘園経営は、佃戸による小作と租税によってまかなわれたが、それは荘園自体が広大であったから可能であった。ところが唐末以後の戦乱によって荘園は疲弊する。逆に小作者としての佃戸は、領主から独立して荘園が細分化される。そのために土地が開墾され農地が拡大する。つまり、それまで荘園内にあった森林は伐採されて木材となり、開墾されて畑地となる。残った荘園も経済効果を求めるために、農地化が進められて、荘園のもつ様相は一変する。長安近郊の荘園は、唐王朝に直結する貴族・功臣の所領が多かったから、王朝の滅亡によって荘園の所有者も逃亡したり、戦死したりして、大きく変わったものと思われる。旧来のままではない。

五代以降、ここを国都とする王朝はなくなり、政治の中心は東に遷る。同時に文化の中心も移って、長安は地方都市として展開する。秦以来唐代に至るまで、文化の中心であったために、いまでもその周辺には史蹟が多い。そしてそれは近代に至るまで、ほとんど手つかずの史蹟であり、換言すれば自然の風化と荒廃にまかせた状態にあった。象徴的な出来事がある。唐の太宗の昭陵の墓道には、六駿のレリーフが鞘堂に収められていた。この鞘堂は、足立氏の写真では半ば屋根が落ち、側壁も崩れているが、棟は残っていて中のレリーフの馬の姿も見える。いつ頃の鞘堂か不明であるが唐代のものとは思われない。農地か荒野か、その中にポツンと建っている(図6)。ところが足立氏の調査から十年程後、一九二〇年前後に、この六枚のレリーフのうち二枚が米国ペンシルバニア大学に納められた。学習院大の村松弘一氏の調査によれば(科学研究費補助金 2009 年度報告)、仲介したのは古物商 C.T.Loo という人物である。足立氏の写真を見れば、いつ盗られてもおかしくない状況にあった。むしろ二〇世紀初頭まで六枚そのまま残されていた方が不思議である。もっとも所有権ということになると、清末当時の歴代王朝の墳陵や陪塚はどうなのか。

盗難・盗掘ということであれば、先に記した項羽が関内に入ったとき、始皇陵を暴いて三〇万人をもって三〇日間副葬品を運び出したが、まだ終わらなかった。あるいはその後、盗賊が槨室の銅を採るのにそれを溶かしたという『水経註』の記事によるなら、盗掘などという事態ではなく、公然とした事業であった。この際、「賈山伝」がいうように、始皇陵には樹木を植えて山林としたのなら、それらの木は銅を溶かすために焼かれたのであろう。いまは灌木と茅草だけである。

ところで、都城や墳墓の構築については、風水説による結構を重視したことは広く知られる。晋の郭璞の著とされる『葬経』がこの説の嚆矢というが、郭璞が著したか否かは不定である。『葬経』自体は唐初にはすでに存在していたようであるが、この書は書名の通り、人を葬る最上の地をいわゆる風水説によって説くもので、理論は土地のもつ気の流行にある。死者を生気に乗せて冥報を得ようとする。ここから都城や家宅の択地法に及ぶ。いずれも北方に主山を配し、その山麓に良気の湧出して

滞留する穴がある。良気は風に流されぬよう主山を奥に東西を小高い丘で囲まれ、南に水流のあるやや盆地状の地を局けつといって風水上の良地とする。東西の丘岡と主山は森林の深く繋がるのを最上とする。

唐の高祖献陵以下殆どの唐の皇帝陵は、渭水の北、紫金山々塊を中心に東西に延びる山陵の南側に造られて、渭水に南面する。一揆反乱に苦しんだとはいえ、さすがに唐王朝である。山を開いて人工の局の如く作る。すでに宮廷内にも風水説は影響した。しかし唐の長安城自体は渭水を北にして、終南山を南にする。風水説とは全く逆の結構である。それは秦漢依頼の故都を中心に置いたためであり、渭水を下って黄河に入り、そのまま東行すれば洛陽に至り、さらに斉から渤海湾に流入するという要衝にある。さらにいえば南の終南山は擁壁であり、東に鴻門・潼関を設けて守りを固めれば、西から北は渭水がめぐって攻めにくく守り易い地という地勢は整う。しかし風水上の小さな局はいくつかあっても、長安全体を位置づけることはできない。結局、長安は中原をおさえる要衝としてのみ機能したといえる。こうした都市は、王朝や国家が強い力をもつ時期にはきわめて豊かに物資が集積され、富も蓄積される。しかし一旦乱れば、その蓄財を消費するだけであって、都市は疲弊する。

4

『漢書』地理志下の巻末に、諸州の民俗・風俗を記して、『詩経』国風・豳詩（七月）を引き、この地が農桑衣食のものはなだ備えるところであり、鄠・杜の地は竹林あり、南山（終南山）には檀栢ありという。

終南山一帯は、三千年前には木材、それも白檀系の高木を産したことが分かる。秦始皇の宮殿建築は、終南山のもつこうした材資を背景とした。もちろんすでに記したように、皇帝の力をもって荆・蜀の地からも良材を集めたが、基本的には当地近傍の地の材を基盤とするものであろう。

この終南山の北麓台地の一つが神禾原である。隣接する少陵原や白鹿原もまた南の終南山麓で一体となる。この西寄りに老子が説経を行ったと伝えられる楼観台がある（図7）。足立氏の写真の通り古木鬱然たる古道観であるが、観宇の多くは明代以降のもので、古くはない。ただし、これが開かれたのは唐以前のことで、場所も変わっていない。唐王朝は李姓であったため、同じ李姓の李耳（老子）を遠祖として奉じた。そのため楼観台は保護されて、その周辺とともに現代に残されている。これがおそらく唐代頃までのこの一帯の状況を伝えるものと考えてよい。杜甫や王維の見た少陵原や神禾原は、このような叢林の北辺にあった。

唐王朝は十九代ほぼ三百年間、長安を国都として君臨したが、その間、記録に残るだけでも七回戦乱にまき込まれ、ために皇帝は他郷に遷らなければならなかった。足立氏によれば、始めは有名な玄宗のときの安祿山の乱で、玄宗は成都に逃れ翌年に長安に帰った。次の代宗のとき吐蕃が長安を陥し、

郭子儀が回復した。さらに次の徳宗のとき、朱泚は反軍を率いて長安に入り、徳宗は東して奉天に遷った。それから百年後、僖宗のとき黄巢の乱が起こり、長安は賊軍の手に陥ちた。三年後に長安は回復されるが、黄巢の徒は宮室を焼き財貨を掠奪して逃亡した。しかも長安に入城した官軍は、黄巢以上の掠奪を行いほとんど無法の状態であった。六年後によく僖宗は蜀から遷ったが、要するに宮城が回復するまでそれだけの時間がかかったということである。しかしまた反乱惹起して皇帝は再び遷る。これによって長安の財はほとんど尽きた。唐王朝最後の昭宗は、李茂貞の挙兵によって華州に逃れ、長安は焼尽した。

晩唐・唐末のありさまは焼かれるための復興のようなものであって、長安に「行人なし」と伝えられる（『唐書』昭宗本紀）。

結局、このような状態になれば、荘園の管理もなくなるし、近郊の山林は恰好の用材の供給源となる。なぜならば、他国から購入する資金もなければ運漕資金もない。資力も人力もなければ自然盗伐による。都合の良いことに荘園の所有者は逃げたか殺害されたか。こうした推測は大きくは誤っていないであろう。長安に近い台地に山林が残されておらず、遠い終南山麓にはまだ唐代のままの森林が存在する事実がそれを示すといえる。

始めに記したように、地中海沿岸の文明を支えたレバノン杉の実情は、まことに惨憺たるものがある。同時に西安南郊の状況もまた文明の持つ両面を描き出している。三千年という規模で見れば、文明・文化の進展は、自然の破壊という代償のもとに行われて来た。中国では六朝頃から陶磁の製作が盛んになり、優れた芸術性と質の高さでその文化が特徴づけられるが、そのために伐られて消えた森林も相当の範囲に及ぶ。

これと全く同じような状況は、現在も進行している。とくに再生不可能な資源を消費することについて、私たちは数百年から千年規模で考える必要がある。

足立氏の遺した写真に触発されて、僅かな手掛かりをもとに本論を記した。二十世紀初頭の長安史蹟の状況を調査、記録した資料としてこの書は第一級の価値を有すると信じる。



図1：阿房宮跡



図2：漢・宣帝杜陵（杜陵原上）



図3：白鹿原

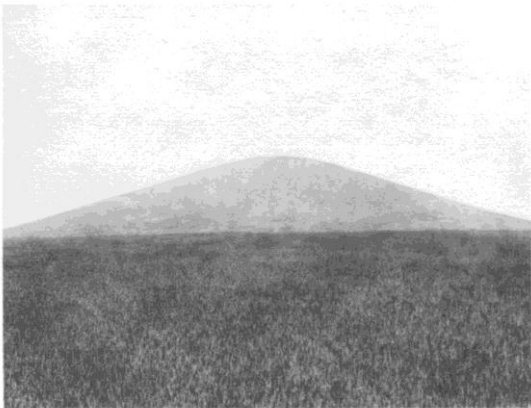


図4：漢・南陵（白鹿原上）

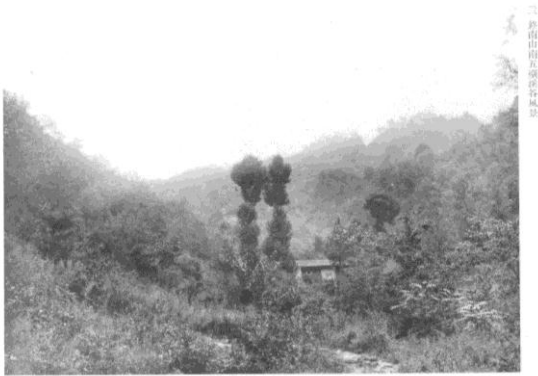


図5：終南山北麓南五台溪流

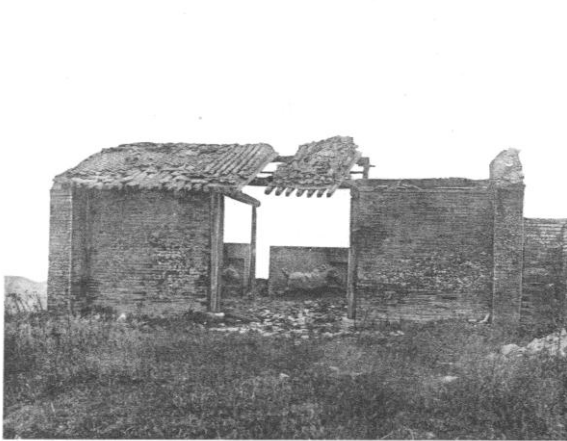


図6：唐・太宗昭陵六駿鞍堂



図7：楼観台

*写真は『長安史蹟の研究』（東洋文庫刊・初版）より。

参考文献

足立喜六『長安史蹟の研究』（昭和 8 年・東洋文庫）

宮崎市定「中国史上の荘園」（『宮崎市定全集』 8 卷・岩波書店）